日本文学部会
―概要―

蒋　蔵 *

第 8 回国際日本学コンソーシアム日本文学部会は 17 日午前 9 時半から 12 時 15 分まで、三時間弱にわたり行われた。国立台湾大学院生の王さん、蔡さん、曾さん、教授の范先生、本学博士後期課程の羅さんに、それぞれご発表とご講演をしていただいた。以下、本部会の内容や質疑応答について、概要を報告する。なお、紙面の都合上、全てを記載できないことをご了承いただきたい。

王瑋婷さん（国立台湾大学院生）は「若山牧水『別離』における旅中詠への一考察―〈生命〉への凝視の視点から―」という題で発表なさった。歌人若山牧水の第三歌集『別離』を四つの段階に分けて、恋愛と関連して分析し、『別離』における旅の役割及び各段階において、歌人牧水は旅の中でどのように「生命」を観照したか、またどのようにして「新生」の道を辿ったかを説明された。質疑応答では、恋との関連で分析するには、「孤独」と「寂しさ」という孤児ゆえの牧水の基本的なスタンスと、恋愛との関係を考えなければならないという意見があった。さらに、恋愛との関連のみならず、歌人が創作する時に取り入れた日本の和歌の伝統や本歌取りの技法なども、考慮に入れるべきだという指摘を受け、今回の発表は和歌の伝統などの要素を考察することに及ばなかったが、今後の課題として考えていきたいと答えられた。

蔡志勇さん（国立台湾大学院生）は「日本近代文学における『遊民』像の諸相―漱石『それから』及び乱歩『屋根裏の散歩者』を例として―」という題で、夏目漱石の『それから』及び江戸川乱歩の『屋根裏の散歩者』の二作品に描かれた「遊民」に注目し、当時の社会的・文化的背景を合わせて、代助と郷田三郎という二人の人物を比較し、「遊民」像の異同を分析した。両者は社会に対する批判性において差が見られるが、家族の絆から逃れ、危険性を持つ都市観察者である点では共通していると結論付けられた。会場から、夏目漱石の『それから』における高等遊民について考える際に、まずは法律、特に民法を考えなければいけないという意見があった。たとえば、結婚しない息子に対して、父親が養育しなければならないという民法の規定があり、その点について、石原千秋も重要な指摘をしている。もう一つ、代助と三千代の関係は姦通罪として訴えられること、その二点を考慮に入れなければならない。上記のような指摘を受け、今回の発表では、法律および時代背景についてまだ考察が足りず、指摘された点を改めて考え、論を深めていくと答えられた。

曾婧芳さん（国立台湾大学院生）は、「『菊花の約』における義兄弟の関係―原話『范巨卿鷄黍死生交』との比較―」という題で、義兄弟の関係に注目し、信義をめぐり、上田秋成の「菊花の約」と原話の比較をなさった。質疑応答では、両作品における「信義」の描き方を通して、古代中国と江戸時代の日本の価値観が違うということが分かるが、具体的にどのように違うのかという質問に対し、江戸時代の日本は中国から影響を受けていると思われるが、時代の差もあるので、改めて検証する必要があると答えられた。また、「信義」を考える際に、テクストに出てきた「軽薄の人」をどのように捉えるか、原話と同じなのか、それと

* お茶の水女子大学大学院生

も違う解釈になるかという質問に対し、今回の考察はそこまで及ばなかったので、「軽薄の人」は誰を指しているかを踏まえてもう一度「信義」を見直す必要があるとの結論に至った。

羅小如さん（本学博士後期課程）は「泉鏡花『夜叉ヶ池』を読む―いえの表象を視座として―」という題で発表なさった。泉鏡花の代表的な「幻想劇」である「夜叉ヶ池」を取り上げ、鏡花自身の婚姻観と大正初年の結婚事情及び家族の成立をめぐる諸問題を視座に据え、従来看過されている晃の存在に焦点を当て、当時の社会的背景がどのように「夜叉ヶ池」における幻想的な世界観を構築する土台になり得たかを考察なさった。会場から、華族という設定と「現世」および幻想的な世界との関わりについて質問があった。「夜叉ヶ池」に先行して「婦系図」という作品があり、その作品では、血のつながり、政治的なつながり、華族と華族とのつながりという家柄にかかわるものに対して、鏡花は抵抗を示しているが、その流れを引き継ぎ、「夜叉ヶ池」では血のつながらない家族という形で家柄に対して抵抗し、幻想的な「魔界」に移すことによって、現世と完全に対立するという構図を成立させたと答えられた。また、このような作品を書く時に、戯曲という形を取ったことの意味や効果について質問されたが、「夜叉ヶ池」が発表された大正二年は、泉鏡花が積極的に戯曲を書く期間であり、「夜叉ヶ池」を書くきっかけとなるのは「沈鐘」という作品の翻訳であるが、戯曲という形の効果については改めて考える必要があると答えられた。

范淑文先生（国立台湾大学）は「近現代文学における『食・もてなし・家族』―夏目漱石・村上春樹の場合―」において、夏目漱石の『門』と村上春樹の『国境の南、太陽の西』との二作品を取り上げられ、「もてなし」という装置は家族の絆や関係を深める手段として発揮される一方、逆に破壊する力も潜んでいる、破壊のメカニズムとして仕組まれる場合もあると指摘された。会場から、漱石と春樹を取り上げたきっかけについて質問があったが、先生は、国民作家としての漱石と今現在世界中で読まれている春樹には何か共通するものがあるだろうかという考えで比較を試みたと説明された。また、もてなしが「破壊のメカニズムとして仕組まれる」場合もあるという結論に対し、小説に描かれたすべてのもてなしに当てはまるものなのか、それとも漱石、春樹というそれぞれの時代を代表する男性作家に共通して見られる特徴なのかという質問があり、すべてのもてなしに当てはまるものではないが、今回の発表で挙げられた場面には特にそのような特徴が見られると説明された。

以上のように、様々な時代、作品、アプローチによって検討が試みられて、大変充実な時間を過ごすことができた。范先生及び発表者の皆様、また参加者の皆様に厚く御礼申し上げる。